

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

養護性の研究は、心理学の分野では母性的養育につながるパーソナリティ特性として、教育の分野では中高生の保育体験学習の効果測定研究として実施されてきた。養護性はその概念特性から子育て世代の親性、もしくは親になるレディネスとしての親準備性として扱われることが多かった。それに対して、本論文は、複雑化した子育て環境への構えや子育ての社会化を的確に検討するために、近い将来、子育てを担うであろう大学生を対象にし、養護性の下位概念である「子どもへの関心」をとりあげ、その因子構造の分析、およびそれと関連する個人内要因の分析、さらに地域の中の子ども、および社会全体で子育てを支える態度との関連を検討した。現代の子育てに関する社会状況を的確に捉え、「子ども・子育てに関する社会的問題を意識し、社会全体で子どもの育ちを支えていこうとする態度」を「子育ての社会化志向」と定義し、その測定尺度の作成と妥当性の検討を行った点は、先駆的であり、独創性が高く、個人の主観として片付けられてきた子育ての意識や感情の研究を大きく発展させることは間違いない。このように本論文の「子どもへの関心」を多面的に扱った点、今後ますます必要となる「子育ての社会化志向」を定義し、その測定尺度を作成し「子どもへの関心」との関連を明らかにした点、結果を踏まえて中学・高校での保育体験学習での指導上の配慮を見出した点、「子どもへの関心」を高めることが予防教育になることへ言及した点、大学生のキャリア教育への応用について考察した点は、これまでの心理学における養護性研究成果を発展させるだけでなく、今後の研究を方向づける上で独創的であり、学術的意義も有している。さらに、今後保育体験学習やキャリア教育を進める上でのエビデンスを提供しているという点で、本論文は教育実践的な意義も有している。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文は、まず養護性を含めた子どもへの態度に関する発達心理学、社会心理学、パーソナリティ心理学、および教育心理学分野の国内外の多くの研究成果を展望の上、「子どもへの関心」を概念規定し、学術研究の流れの中に本研究を位置づけている。そして「子どもへの関心」と関連する要因の特定、要因間の関係について仮説を設定し、それをモデル図に示し、調査から得られたデータを相関分析することでモデルの妥当性を検討するという方法を用いている。これらの方法は心理学的に妥当であり、論理的に矛盾なく展開されている。データ処理は緻密に実施されており、結果の解釈は学術的に適切に行われ、考察も学術的な意味づけに教育実践的な提言を追加するという意欲的な内容に仕上がっている。以上のように、本論文は、教育実践の示唆に富む心理学的な基礎研究として高い水準にあるといえる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文は、子どもへの態度を測定した国内外の多くの研究を展望し、8つの測定法が採用されてきたことを指摘した上で、「子どもへの関心」「乳幼児との接触経験と接触時感情」「対児感情」「子ども観」「他者意識」「次世代育成力」「養護性」「子育ての社会化志向」は質問紙法を、

「子どもへの選択的注意」は選好法（画像呈示法）を用いて測定した。サンプルサイズは十分である。統計処理としては因子分析と重回帰分析が用いられており、心理学的研究方法として、データ収集方法も分析方法も妥当であると判断する。新しい尺度の作成時には予備調査の実施と質問項目の妥当性の検討を実施している。尺度作成後はその尺度の併存的妥当性と基準関連妥当性の検討、複数の研究結果を踏まえての構成概念妥当性の検討も行っている。分析の流れは非常に緻密であり、結果の表示方法も適切である。調査の際の倫理的配慮も適切になされている。このように本論文の方法はエビデンスレベルの高いものとして高く評価できる。

（４）研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

単に「乳幼児との接触経験」が「子どもへの関心」を高めるのではなく、「接触時感情」がポジティブであることが重要になるという結果は、量的な研究でははじめて見出された成果である。この結果から保育体験学習の進め方を提言した考察は教育実践上意義深い。また、「家庭での子育て」から「社会での子育て」に代わりつつあるわが国の子育て状況にあって、学術的にはじめて「子育ての社会化志向」を測定する尺度を作成した。そして、個人的で主観的な「子どもへの関心」が「社会での子育て」を志向する態度と多面的な関係を有することを見出した結果は学術的に意義があり、また先駆的であるといえる。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

「子育ての社会化志向」尺度は今後さまざまな世代を対象に適用される可能性のある応用性の高い尺度に仕上がっている。この尺度を含め本論文で報告された複数の研究は、心理学関係の４種類の学術雑誌に掲載・採択されており、本論文が学術的に高い水準にあることが認められている。また本申請者は研究成果の一部を国際会議（第31回国際心理学会議2016）において発表を行い、大学生の子ども・子育てへの態度研究の意義を発信したことは特筆すべき事項である。本研究の成果に基づき、青年期の保育体験学習、予防教育、大学生のキャリア教育へ提言した考察は、教育方法論的に価値がある。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に十分に相応しい優れた研究であると評価した。